

看板に偽りなし

総合科学部長 生和 秀敏

「いろいろな専門が分かれているものを、医学博士といった実態のわからない看板で総称すべきではない。赤痢博士とか腸閉塞博士といった名称でなければ人を惑わすことになる。だから自分は博士になることを断った」。漱石が博士号を辞退した表向きの理由として伝わっている逸話である。真偽のほどは定かではないが、実態のあいまいな看板が横行する世相に対する漱石一流の批判精神の現れといつてよい。

漱石の時代とは異なり、ここまで博士や学士が増えてくると、実態のない看板に惑わされるほど世間はうぶではなくなっている。石を投げれば大学生に当たる、といわれているご時世であり、学位記を学資を出してくれた親に対する領収書と割り切る学生もいる時代である。学卒者に対する世間の眼は諸君が思う以上に厳しい。浮かれたり思いがつたりすると間違いなく痛い目に遭う。

優しい旅人であった諸君。卒業を機に、学卒という看板を取り払ったとき、自分に何が残っているかを真剣に見つめ考えてほしい。これからは実質が問われる時代であり、自分に何ができるかが問われる時代になる。君たちはその中で生きなければならぬ。卒業式とは、優しい旅人が遅い旅人への変身を決意する場なのかもしれない。今後の健康を祈る。



これからよろしく
総合科学部長 吉田 千春

私の大学生活、それはすなわち弓道部を中心とした生活であった。

平成五年四月、私は期待に胸をふくらませながら弓道場の前に立っていた。憧れの廣大弓道部。しかしながら、現実はその甘いいものではなく、西条の冬の厳しさや思い通りに弓を引けない自分に対するいらだち、選



東千田町キャンパスの弓道場での記念写真。本人上段右から2人目
大声で言いたい。「今までありがとう」。そして「これからよろしく」。



夏休み前の打ち上げコンパで。本人左端

私の大学生活所感

社会科学部 大宮 健史

私が大学の学部を卒業したのは十年以上前である。社会人から再び学生生活に戻ったわけである。広島大学が移転完了した年に社会科学部博士課程前期に入学した。大学が街から田園地帯に移転して、広大な敷地での駐車場不足による規制、また他方では盗難等一部に問題を抱えていると聞く。大学は施設整備の次は、人間らしい顔をした快適な環境づくりの途上にあるところであろう。

ところで、私にとって特に大学の有り難かった点は、研究上さまざまな文献を渉猟する際、大学図書館のレファレンスカウンターを通じて広島大学にない文献を、時には海外の図書館にまで求められたことである。これは、個人ではなかなかできないことで、修士論文作成に大変助かった。四十八の文献を学外に求めてほとんどを得ることができた。図書館のカウンターの方々に感謝申し上げたい。同時に、大学の日常を支えている他のさまざまな方々にもお礼を申し上げたい。

人生の選択

文学部長 向山 宏



人は短い生涯を終えると、あとは灰色の影となつて生前の暮らしを続ける、というのが古代ギリシャの伝統的生死観であるが、エジプトの影響を受けたプラトンは少し違った考えを持っていて、人は百年この世に生きて、千年あの世で暮らし、またこの世に生まれてくる、という永久運動(靈魂不滅)を信じていたようである。

人は死後に裁判を受けて、それからの千年を暮らすあの世を指定される。天国だとか地獄だとかである。地獄にも各層があつて、非道であつた者は永遠の地獄に墮ちたりする。一般的には、百年の生涯を反省しつつ、千年の苦行(安業)をするのである。

その反省の上に立つて、人は次の人生を選択する。王様は懲りたから乞食になるとか、農夫は辛いから商人になるとか、人間は残酷だから野の花になるとかの選択である。何でも自由に選択できる。そして、忘却の川を渡り、忘却の水を飲んで、すべてを忘れてこの世に生まれる。このときの水の飲み方は多少問題で、たくさん飲んだ者はすべてを忘れ

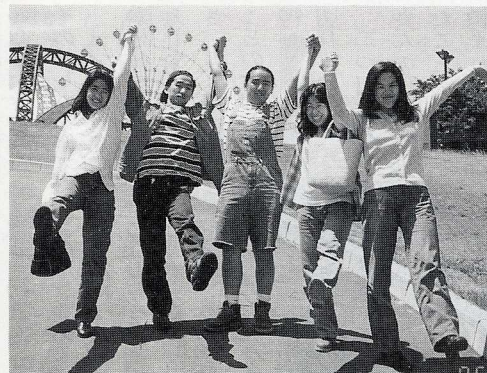
てお馬鹿さんになり、少し飲んだ者はあの世の記憶を漠然と残して賢いのである。ただ、これは偶然であつて、従つて賢愚は善悪とも不幸とも関係がなく、近代人(とくに大学人)は高く評価するが、本来はあまりにいいことではないのである。さて、卒業生諸君は、自由な選択とは言えないまでも、それぞれに人生を選択し、いま飛び立とうとしている。いずれの選択にも危険と至福が付きまとい、至福も増長と隣り合わせ。安全な道はない。思慮と幸運を祈る次第である。

一期一会

文学部 枝次 真理

大学生活が私にもたらしてくれたものは、それは邂逅の歓喜に尽きる。とりわけ、自分とは異なつた人生を歩んできた人々との出会いは、自分を見つめ、自分に対する可能性を広げる契機となつた。

四年前、自分の価値観の追究と生き方の探求が目的で大学に入学した。そして、卒業を目前にした今、その課題に何らかの答えを見出すことができたように思える。しかしながら、人生は無限に広く深いもので、まだまだ自分の知らないどれほど多くのことが存在しているか計り知れない。現在、世相が混沌とし人間の生き方も多様化、複雑化してきている。そうした社会にこ



大学3年の6月、サークルの仲間と遊園地(みろくの里)にて。本人左端

れから出るにあたり、これら未知との邂逅を一つ一つ大切にしていきたいながら、目先のことにのみにとらわれず、今この時にしかできないことは何か、得られないものは何か、ということをしつかり見つけていきたい。そして、他の誰とも代わることでできない、今与えられた自分の人生を一生懸命歩んでいこうと思う。

はじめての西条の夜

文学研究科博士課程前期 長井 博志

初めて西条キャンパスを訪れたのは、静岡大学四年の春であった。目的は、大学院の受験に当たり研究室訪問をすることにあつた。その前夜十時頃に東広島駅に到着した。当時の私は東広島島についての知識を全く持たず、



童心に返って雪ダルマ作り

新幹線の駅であれば近くにビジネスホテルがあると想像していた。しかし、駅を出るとまばらな民家の明かりと静寂のみがあつた。西条駅で降りるべきであつたと知つたのは後日である。仕方なく、近くに建築中の小屋を見つけ、ブルーシートを巻いて眠つたのが、この地での最初の思い出である。大学院入学後、帝釈峡の学術調査、調査報告書の作成といった研究室関係のことから、私的なことまで数々の貴重な経験を積み、また、思い出を作ってきた。だが、はや二年が過ぎ、この地を去ろうとしている。在学期間は長くなかつたが、諸先生方のご指導や学友たちからの学問的刺激などにより、さまざまな面で成長できた。心よりお礼申し上げる。お世話になつた方々に感謝の意を表し、この文を終えたい。